様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６１８
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ１８１０６

研究課題名（和文）名詞句構造の通言語的研究

研究課題名（英文）Cross-linguistic investigation of nominal structure

研究代表者
猪熊　作巳（Inokuma, Sakumi）

実践女子大学・文学部・准教授

研究者番号：９０７１１３４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：極小主義アプローチに基づいて通言語資料を対象とし、名詞類ー代名詞、固有名詞、語彙名詞ーが示す特徴を解明するべく研究を進めた。①この三種の名詞要素が互いにどのような共通点と相違点を持つのか、そして②これらの名詞要素が文構造内で示す特徴ー特にこれらが主語として用いられる際に述部とどのような一致を見せるのかーについて検討した。
　①については、統語構造としてはどの名詞句も同じ構造を持つものの、音声形で相違が現れることを主張し、②については数量名詞句の特性、AAVE（いわゆる黒人英語）の名詞句が示す一致パターン、そして動詞述部と名詞述部の間に見られる一致パターンの相違についての観察と考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は以下の通りである。主語‐述語の一致現象に対する分析を通じて（i）名詞句内部構造と節構造の接続様式という理論的問題に対する一つの知見を提供し、（ii）項名詞句と述部名詞句の相違の一側面を指摘した。また、国際言語としての英語への関心が高まるなか、非標準英語（AAVE）が示す規則性と標準英語が持つ特異性を示すことで、英語の多様性への理解を促進するという点で社会的意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：Within the Minimalist framework, syntactic and semantics properties are investigated across various nominal elements - pronouns, proper nouns and common nouns - from cross-linguistic perspective. Firstly, syntactic similarities and differences are pointed out among these three types of nominal elements. It is argued that the differences lie in their phonetic realization, despite the fact that they do have uniform syntactic structures. Secondly, coherent syntactic patterns are identified in less investigated phenomena, including subject-verb agreement in African-American Vernacular English (AAVE) and number mismatch found in certain nominal predicates in standard English.

研究分野：生成文法理論

キーワード：名詞句構造　一致現象　AAVE　共格

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

生成文法理論研究の進展において中心的な関心を集めてきたのは、節レベルと名詞句レベルでの種々の現象である。Chomsky（1970）や Jackendoff（1977）が指摘した節構造と名詞句構造の並行性は、Abney（1989）によって、X'理論の枠組みの中で一つの到達点を見た。しかしこの範疇横断的共通性は、その後の極小主義（Chomsky 1995 以降）の進展の中で位置づけが不明確になっている。特に裸句構造の採用により、X'理論が捉えていた共通性は発展的にではあれ霧散した。一方で Rizzi（1997）以降のカトグラフィ研究により句構造の精緻化が進む中で、節と名詞句はそれぞれに複雑な内部構造が提唱され、両者を横断的に捉える視点は弱まっている。

この状況の原因の一つとして考えられるのは以下のような事情である。どの言語であれ、節という統語単位が命題という意味単位に写像されうることは間違いない。命題という意味単位が人間にとって普遍的な概念であるならば、形態的具現の様式に関わらず、節という単位もまた普遍的である、と考えられる。その一方、名詞句においては限定詞の有無とその形式に多様な言語間差異が観察され、写像されうる共通の意味単位が想定しにくい。

２．研究の目的

前節で述べた、節構造と名詞句構造に対する関心にみられる蓄積の不均等を改善するため、本研究は、近年の極小主義的・進化生物言語学的アプローチに基づき、通言語的資料を対象とし、特に名詞句がもつ統語構造とその意味解釈を解明することを目的にすえた。具体的には、代名詞、固有名詞、語彙名詞の三種について、その形態・語形成的側面、統語的側面、意味的側面それぞれの詳細な比較検討を行い、これらが節構造に組み込まれる際の特徴について考察を加えた。

３．研究の方法

近年の超学際的展望のもと、通言語的背景の中で日本語の名詞句構造の詳細を明らかにすることを第一の目標とした。そのために、統語的人称と解釈的人称の乖離や数素性の不一致といった、φ素性（名詞句の人称・数・性に関わる情報）に関わる現象について、異なる言語からデータを蓄積し、それらの比較対照を通じて分析を立案した。その際には、経験的に妥当な統語理論を目指すことはもちろんのこと、その理論が近年の極小主義の枠組みの中でどのように位置づけられるかについても検証した。広範な言語の名詞句構造に関するデータの収集と整理を行い、その結果を、これまでに得られた理論的知見に統合する作業を進めた。

４．研究成果

2017 年度は、上記三種の名詞句のうち、特に固有名詞についての調査を進めた。従来、固有名詞に関する研究は理論言語学的枠組みよりもむしろ言語哲学的、あるいは心理言語学的な枠組みのもとでおこなわれることが多かった。このため、第一にこれら隣接領域に属する研究の文献収集とその議論の分析、整理を進めた。固有名詞の意味解釈については、言語哲学史上大きくわけて二つの提案―がなされている。一つは Russel や Searle に代表される、固有名詞は記述的意味を持つ、とする立場、もう一つは Mill や Kripke に代表される、固有名詞は記述的意味を持たない、とする立場である。これら二つの仮説の妥当性について統語分析的な観点から評価した研究は少ないが、概略、前者は固有名詞を他の語彙名詞と同様に N（oun）とみなす方向を示し、後者は固有名詞を冠詞や指示詞のような D（eterminer）要素ととらえる方向を示す。2017 年度の研究では、固有名詞の基本的な性質を整理したうえで、固有名詞の前者を支持する Matushansky（2006 など）と、後者を支持する Hinzen（2016）の提案を比較し、両者を整合性のあるかたちで統語理論に昇華する分析素案を考案した。

2019 年度は文中において名詞句が主語として生起する際の、動詞との一致（agreement）パターンに注目し、その一致パターンを通じて、当該名詞句が持つ統語的素性を明らかにする方略について研究を進めた。具体的な方法としては、主にアフリカ系アメリカ人によって用いられる英語変種（いわゆる AAVE）を分析対象とし、そこで用いられる be 動詞の変異パターンについて実証的な研究を進めた。このような言語変種についての研究は、往々にして文化的、または統計的な観点からの議論にとどまりがちだが、猪熊（2020）「Lorraine Hansberry, A Raisin in the Sun にみられる be 動詞の非標準形式について ――テクスト素材を用いた実証的言語研究の一例 ―」（『実践英文学』72 号に収録）においては、be 動詞が生起する文法環境（すなわち、時制や主語の人称・数、文の極性など）を詳細に分析することによって、標準英語からの「逸脱」ととらえられてきた現象が、AAVE 独自の規則性をしめすこと――したがって、AAVE の主語・動詞一致現象に対しても、統語理論が措定しているような文法メカニズムによる説明が適用可能である

こと――を明らかにした。翻って、この成果からは AAVE の名詞句が標準英語とは異なる統語的素性を持つことが示唆される。

2020 年度は、名詞句の言語学的諸相を中心に、その習得の問題と概念化という心理学的問題について考察を進めた。英語の this/that や日本語の「この／あの」に代表される、指示詞を伴う名詞句は、典型的には話者の眼前に存在する対象を指し示すという「直示性」を持つ。同時に、これらのタイプの名詞句には、典型的には（同一の性質を持つ）集合を意味する語彙名詞が生起し、その集合の中から、指示詞の意味機能によって特定の個体（群）を抽出する、という意味解釈を受ける。指示詞付き名詞句が持つこの２つの典型的な特徴それぞれについて、一見反例と思われる事例が報告されている。前者については「Generic Demonstrative」と呼ばれる構造―すなわち限定詞が用いられているにもかかわらず、総称的な解釈を受ける名詞句―であり、後者については、「Affective Demonstrative」と呼ばれる構造―既知の固有名が指示詞とともに用いられ、固有名が指示する対象に対する話者の主観的評価が示唆される名詞句―がそれにあたる。この２つの特異な構造は、両者ともに話者の主観的評価が示唆されるという点で共通性を示す一方、前者の構造では普通名詞が生起し、後者の構造では固有名が生起するという相違も見られるが、語彙名詞を「カテゴリーに対する固有名」ととらえ直すことによって、統一的な説明を与える可能性を検討した。この分析によって、語彙名詞と固有名を相互に排他的なカテゴリーとみなすのではなく、それぞれの語彙項目が指示する集合の大きさ・具体性によって相対的に位置づけられる、単一の連続的なカテゴリーとみなす方向性が立ち現れ、対象の「概念化」という心理学的問題にも重要な示唆が提供される。

2021 年度では研究実施期間全体を通じて取り組んできた、名詞句の構造、および文構造の中における名詞句の働きについての通言語的検討という課題に対して、その総括と今後の発展可能性を示す成果を挙げられたものと考える。稲田・猪熊（2022a）「意味とは」および猪熊・稲田（2022b）「意味現象を考える」（いずれも大津他監修・杉崎他編『言語研究の世界　生成文法からのアプローチ』（研究社）に収録）では、名詞句の意味解釈、およびそれが文全体の意味構造の中で果たす役割という観点から論じた。意味論的問題を取り上げた類書では、多くの場合、文構造の観点にたった議論が多い。この文脈においては名詞句の内部構造は捨象され、それ以上分析不可能な原子的要素とみなされる。これに対し上掲の論考では、名詞句全体の意味的性質を起点にしてさらにそれを分解し、名詞句内部の要素の合成へと議論を進め、文構造における名詞句の働きを名詞句内部のそれぞれの要素に還元する仕組みを提示している。また、猪熊（2022c）「英語の述部名詞に見られる特異な一致現象」（『実践英文学』74 号に収録）では英語の述語位置に生起する特定の名詞句と、それを導く be 動詞の間に見られる、単数・複数の不一致現象を取り上げている。この現象を説明するためには、名詞（句）そのものの意味のみならず、with に導かれる共格前置詞句との相互作用を考慮に入れる必要があることを示し、名詞句、前置詞句、be 動詞句の相関として文構造とその意味解釈を捉える、という方向性を指摘した。

以上をまとめると、本研究では、名詞要素と名詞句の内部構造の詳細な検討と、名詞句の節構造への編入という観点から眺めた主語‐述語の一致現象に対する分析を通じ、(i) 名詞句内部構造と節構造の接続様式という理論的問題に対する一つの知見を提供し、(ii) 項名詞句と述部名詞句の相違の一側面を指摘した、と総括できる。また、国際言語としての英語への関心が高まるなか、非標準英語（AAVE）が示す規則性と標準英語が持つ特異性を示すことで、英語の多様性への理解を促進するという点で社会的意義を持つものと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 猪熊 作巳	４．巻 72
２．論文標題 Lorraine Hansberry, A Raisin in the Sunにみられるbe 動詞の非標準形式について ―― テクスト素材を用いた実証的言語研究の一例 ――	５．発行年 2020年
３．雑誌名 實踐英文學 = Journal of Jissen English Department	６．最初と最後の頁 55-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002082	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 猪熊 作巳	４．巻 74
２．論文標題 英語の述部名詞に見られる特異な一致現象	５．発行年 2022年
３．雑誌名 實踐英文學 = Journal of Jissen English Department	６．最初と最後の頁 79-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002340	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 大津 由紀雄、今西 典子、池内 正幸、水光 雅則、杉崎 鉱司、稲田 俊一郎、磯部 美和	４．発行年 2022年
２．出版社 研究社	５．総ページ数 368
３．書名 言語研究の世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関